

羅針盤を手に、学生自らが「現場」に学び、行動することによって、  
実社会で生き抜くための総合的な人間力を育てます。

#### 正課科目

- 学部専門科目
- 大学院専門科目
- 教養教育科目

#### 社会連携型 プロジェクト学習

### PROJECT BASED LEARNING

#### チュートリアル型 プロジェクト学習

#### 課外活動

#### プロジェクト活動の属性

- 期間が限定されている
- 目標を明確化する必要がある
- 自分たちでスケジュールを決めなければ進まない
- 手近なマニュアルがない
- リスクとトラブルがつきものである
- 大小の問題点の発見と解決を図らなければ進めない
- 情報共有と時間管理が必要である
- 社会とつながる行為である



プロジェクト学習(プロジェクト・ベースド・ラーニング)とは、プロジェクトの教育力を生かした学生主体の学習形態を意味しています。

この学習形態を端的に定義するならば、次のようになります。  
「一定期間内に、一定の目標を実現するために、自律的・主体的に、学生が自ら発見した問題に取り組み、それを解決しようと、他者と協働して取り組んでいく創造的・社会的な学び」

プロジェクト活動には、上図(プロジェクト活動の属性)のような属性があります。まさにこれらの属性は、現代の学生にとって未体験の領域であり、コミュニケーション不足や行動力の不足を指摘される学生には「逆境」そのものと言えるでしょう。むしろ、これらの困難な属性を「プロジェクトの教育力」ととらえ、トラブルやリスクを抱えながら試行錯誤を繰り返す中で、学生自身が実践的に課題を探求していく力を身につけることができるようになります。

プロジェクト学習には、大別してふたつの種類があります。ひとつは社会連携型であり、もうひとつがチュートリアル型です。前者は、実際の社会

の現場で現代社会の抱える課題を発見し、その解決をはかるために学習者が自律的に活動を通して学ぶことであり、後者は、事前に設定された課題を、一定の環境と条件の下で解決するために学習者が主体的に課題を探求していく学習です。同志社大学では、両方のタイプの学習が実践されています。

また、学習形態によって、正課科目と課外活動に大別されます。正課科目も、学部の専門科目や大学院の専門科目、学部横断の教養教育科目など、幅広い授業が展開されています。課外活動も大きな意味で学生の「学び」の場として重要な役割を果たしています。学習形態は異なりますが、課題発見・解決のプロセスを通して、主体的・自律的な課題探求力を身につける学習という意味では共通しています。

自発的・行動的な学生の情熱と意欲を誘発する学習活動であるプロジェクト学習は、今日、高等教育機関に幅広く導入されるなど、社会からも注目されている学生主体の新しい学習形態です。



教育支援機構長

圓月 勝博

## 未知の世界に勇敢に向き合いながら 正しく行動し続ける人間力を自ら育てる

「プロジェクト」という単語が、「プロジェクター(投影機)」という言葉から今も伺えるように、「前に向かって投げる」という語源を持つことは、皆様もよくご存じのことと思います。同志社大学はプロジェクト学習(Project-Based Learning)の普及を推進することで、自分の前に広がる未知の世界に向かって、学生一人ひとりが進んで身を投じていくことを応援しています。

医学などの発達のおかげで、平均寿命が飛躍的に伸びた今、大学を卒業する若い学生の前には、それまでの人生の3倍にあたる60年の歳月が待っています。今から60年前、人間と情報が世界中を自由自在に駆け巡ることができる現代グローバル社会を誰が正確に予測できていたでしょうか。さらに、これからの60年間、今の私たちが想像することもできないような勢いで、社会はもっとめまぐるしく変化していくにちがいありません。

現代社会において、幸せな長い人生を過ごすためには、既成概念にとらわれすぎることなく、未知の世界に勇敢に向き合いながら、正しく行動し続ける人間力を自ら育て続けなければなりません。大学に在籍している間に、先人が残してくれた「知識」をしっかり学ぶことが大事であることは、今も昔も変わりはありませんが、大学を卒業してからも、未来に向かって進んで学び続ける「知恵」を持っているかどうかは今後さらに大切になるでしょう。

同志社大学が推進するPBLには「自治自立の精神」の育成という本学の伝統的な教育理念の実現とともに、本学の門を叩いてくれた学生が、大学の中で楽しい体験をするだけでなく、大学を出た後も幸せな長い人生を送り続けて欲しいという私たちの切なる願いが込められています。私たちが学生一人ひとりの成長を応援するように、皆様が同志社大学のPBLの成長を応援して下さることを心からお願いいたします。

# Contents

ごあいさつ Contents 03

産業調査実習 04

社会学部 | 産業関係学科

学生ケーザイレポート 05

経済学部 | 経済学科

アカデミック・スキル 06

政策学部 | 政策学科

ジョイント・リサーチ 07

文化情報学部事務室 | 文化情報学科

ソフトウェアエンジニアリング 08

理工学部 | インテリジェント情報工学科

機械設計製作 09

理工学部 | 機械システム工学科

プロジェクト科目 10

全学共通教養教育センター |  
全学共通教養教育科目

プロジェクト科目(キャリアセンター提案科目) 11

全学共通教養教育センター |  
全学共通教養教育科目

実践神学研究演習9

「教会インターンシッププログラム」 12

神学研究科 | 神学専攻

専攻共通特殊講義(情報技術)MOT科目 13

工学研究科 | 技術経営コース

Advanced Course of  
Infrastructure Engineering  
インターンシップ/ワークショップ 14

工学研究科 | 電気電子工学専攻

プロジェクト特別演習A・B 15

生命医科学研究科 | 生命医科学専攻

調査研究プロジェクト 16

総合政策科学研究科 |  
公共政策コース/企業政策コース/国際政策コース/  
ヒューマン・セキュリティ研究コース/  
ソーシャル・イノベーション研究コース

フレッシュャーズキャンプ/函館キャンプ

京町家異世代協同プロジェクト 17

学生支援センター

ローム記念館プロジェクト 18

京田辺校地総務課 | ローム記念館事務室

メッセージ 19

# 産業調査実習

社会学部 | 産業関係学科 3年次生

社会学部の各学科では、演習や実習の授業を通じてPBLの実践を積み重ねてきています。すべての活動を限られた紙面で取り上げることは不可能なので、ここでは産業関係学科の「産業調査実習」について紹介いたします。

今日の産業社会は人々の雇用関係に基づく労働によって支えられています。雇用関係が良好な社会が良い社会に違いありません。産

業関係学科は、この雇用関係に関する理論や実践を体系的に学ぶことを目指しています。したがって、働く現場に触れる機会をさまざまな形で提供しています。「産業調査実習」では、「社会調査」という方法で問題をすくい上げ、分析を行い、その解決策を探る過程を体験してもらいます。

## Report 01 >>> 春～秋学期に研究テーマの調査・集計・分析 11月の中間報告会にてプレゼンテーション

春学期は、文献を用いて課題設定の仕方や論理構成の方法を学びながら、適当な資料やデータを用いて分析の演習を行います。秋学期は、研究テーマを決め、課題にふさわしい手法を検討して調査を実

施します。集計と分析の作業を経て、この授業を受講していない同級生の前で11月頃に中間報告会を行います。そこで出た質問や意見をもとにさらに研究を進め、年度末には調査報告書を作成しています。

## Report 02 >>> 自ら課題を設定し取り組むことで論理的思考力を養う

与えられた問題を解くのではなく、自ら課題を設定し研究テーマを探求することを通じて、それまでに得た知識や経験を総合して判断する論理的思考力を養うことができます。また、実際に調査を企画し実施することを通じて、企画・立案能力を高めることができます。もちろん、初めて経験する事柄ですから、調査を依頼しても断られたり対応がまずくて叱られたりと、試行錯誤の連続です。そうした社会調査の一連の過程を曲がりなりにも経験することによって、リサーチ・リテラシー（調査結果の批判的読解能力）を身につけることができます。さらに、副次的な効果として、見知らぬ大人との交渉を通じて社会人としての礼儀やマナーを身につけ、コミュニケーション能力を高めることができます。

この科目を履修するためには授業時間外に多大な作業時間を必要



とするので、学生たちは（担当教員も）非常にしんどい思いをします。しかし、授業が終わった時点での達成感は大きく、教員の目から見ても確かな成長のあとがみられます。

### 今後の予定

当初の計画通りにはなかなか進まないで、座学を最小限にするなど工夫を試みています。その一方で、計量分析の学習を充実させることも課題です。また、一般的に調査環境が悪化してきており、調査に

応じてもらえる企業や団体を探すことがだんだんむずかしくなっていることが大きな課題です。調査対象を限定するなど、調査の実施方法について模索する必要がありそうです。

# 学生ケーザイレポート

経済学部 | 経済学科 全年次生

経済学部ではプロジェクト的な研究活動に対して支援を行っています。2008年度は25件のプロジェクトを支援しました。成果は経済学

部ホームページ(<http://www.econ.doshisha.ac.jp>)で「学生ケーザイレポート」として報告されていますが、ここでは一つだけ紹介します。

## Report 01 >>> ディベートを通じて日本経済の諸課題について理解を深め、各ゼミの相互交流により知識を深化させる

本プロジェクトは、北川ゼミ・小林ゼミ・竹廣ゼミの3年生による合同ディベートを通じて、日本経済の諸問題を探究し、理解を深めるとともに、ゼミ横断的な学習機会を設けることで相互交流による知識の深化を目的として活動してきました。

各ゼミをベースとしながら、合同ゼミや対外ゼミといった以下のような活動に、1年間にわたり取り組んできました。

### 2008年度の年間スケジュール

- 7月 5日 ・ 3ゼミ合同ディベート大会
- 11月22日 ・ 北川ゼミ・村田ゼミ(関西学院大学)の対抗ディベート
- 12月21日 ・ 小林ゼミ・竹廣ゼミの研究報告および討論会

7月に行われたディベート大会では、「日本は派遣労働を禁止すべきである。是か非か?」を統一論題とし、事前に約1ヶ月にわたり各ゼミで知識を深め、実践技能を高めるトレーニングを経て大会に臨みました。当日は3ゼミ11チーム(うち1チームは基礎ゼミからの特別参加)により、予選と決勝トーナメント形式で白熱した試合が展開され、北川ゼミ



の2チームが優勝と準優勝、小林ゼミの1チームが3位、竹廣ゼミの1チームが特別賞を受賞しました。

11月には北川ゼミと関西学院大学 村田ゼミのディベートが行われ、これまでの活動を通して鍛えた力を発揮した結果、対外的にも十分な成果をおさめることができました。

また、12月には小林ゼミと竹廣ゼミの研究報告及び討論会が行われました。両ゼミそれぞれ3チームが各テーマについての研究報告を行い、それに対して積極的な質疑応答がなされました。それにより、多様なテーマに関する相互理解を深めることができました。

## Report 02 >>> 2009年度同志社大学経済学会主催のディベート大会開催へと発展

ディベート大会の論題や討論会報告に向けての取り組みを通じて、学生の目がより専門的な知識に向けられたことが重要な成果でした。また、チームの結束力強化や、論理的思考力、傾聴力、プレゼンテーション力の向上はもちろん、本プロジェクトがゼミの枠を超えたアカデミックな交流の機会となったことも、大きな成果であると考えます。さらに、このプロジェクトは、2009年度同志社大学経済学会主催のディベート大会開催へと発展し、現在も進化を続けています。

その他プロジェクトの活動成果についても、経済学部のパンフレットやホームページで取り上げていますので、参照してください。以下のような活動(2008年度・抜粋)を支援しています。

### 支援活動(2008年度・抜粋)

- ・ 経済学的視点、経営学的視点の両面からみる企業および商店街の行動についての考察
- ・ アジアインターンシップ2008  
～ハノイ国民経済大学と中央大学との合同ゼミにおいての論文発表～
- ・ 政策フォーラムでの政策提言の発表(in 慶応義塾大学・明治大学)
- ・ 日本学生政策会議(ISFJ)に参加し、政策提言をプレゼンテーション

# アカデミック・スキル

政策学部 | 政策学科 1・2年次生

現在、国内外では深刻な課題が山積しています。少子・高齢化や地球温暖化等の課題解決にチャレンジするためには、多様な学問分野を学ぶとともに、現実の場でそれをどう活かし課題解決していくかという理論と実践との交流が必要です。政策学部では、2008年度に文部科学省から「質の高い大学教育プログラム」(教育GP)の選定を受け、これまで以上に理論と実践との交流教育を柱としたPBL教育を推進しています。

このために学部教育の前半部分では、読解、分析、構想、伝達の基礎的素養を身に付けるために、多数のアカデミック・スキル科目(AS科目)を配置しています。この教育を前提に、学部教育の後半部分では、各種専門科目の学習意欲を高め、専門演習ではより高度な政策提案能力を養っています。

## Report 01 >>> 京都府内の自治体をフィールドとして 学習の道程を社会と共にプロデュースする能力を養う

それでは、政策学部教育の基盤を成すAS科目のひとつ(科目代表者・今川 晃、科目担当者・杉岡 秀紀)を紹介します。本講義では京田辺市をフィールドとして、課題解決やそのための学習の道程を社会と共にプロデュースする能力を養っています。

具体的には、本講義ではプロジェクト学習などでよく使われる「ポートフォリオ(活動や学習の記録を綴じたクリアファイル。我々は「まちづくりポートフォリオ」と呼んでいる)」を積極的に導入しています。このツールの導入により、事前学習やヒアリングに係る資料、写真などが全て一元管理でき、学習そのものがいわゆる「見える」ようになってきました。学習の履歴、つまり自分の成長が見えてくると、不思議と受講生間に主体性や積極性、また、このポートフォリオを作る楽しみといったものが醸成されていきます。「楽習」とまでは言いませんが、偶然にもそのような副次効果も生まれてきます。

また、本講義では徹底的に受講生に主導権を握らせています。具体的には、テーマやゴール設定からヒアリング先の選定など、講義の根幹に関わる部分は全て受講生に委ねています。もちろん教員は



背景となる学問的知識や理論等最低限のことは教育し、現場にも同行していきます。しかし、PBL教育において最も大切と言われる「社会から学ぶ」「学生同士から学び合う」という余白部分はしっかりと残すこととしています。喩えれば、マラソンでいう「伴走」です。いずれにしても、この「主客の転換」により、学生は自然と自らの頭で考え、行動するようになってきました。そして、多世代・異文化の人たちともいつの間にかコミュニケーションをとれるようになってきました。座学の中だけでは教え切れない「学ぶ」「育つ」という瞬間を、本講義ではプロデュースできているのです。

## Report 02 >>> ホームページ「ポリスタ」、インターネットTVの開設により 学生と社会との交流を促進

教育GPにおけるAS科目や専門演習科目では、学生自身による自己評価、学生の政策提言等の発表に関して、市民・公務員・議員等による外部評価を実施し、さらには学生のレポート等を評価し、学生が社会で活躍できるように学生に指針(総合評価)を提供しています。

そして、学生の説明能力、表現力を実践の場で試し社会との交流を促進するため、政策学部設置以来ホームページ上で学生の活動内容を紹介してきた「ポリスタ」に加えて、自治会やNPO等の地域団体の活動内容や分析内容を映像で発信する「インターネットTV」も開設しています。

### 今後の予定

このような多様な社会との関係の中で機能する政策学部型PBL教育によって課題発見能力や政策提案能力を身に付け、学生にとっての「意思あ

る学び」が、社会にとっての「意義のある学び」となり、少しでも「社会」を前に進められるよう、今後もPBL教育にこだわりながら頑張っ

# ジョイント・リサーチ

文化情報学部事務室 | 文化情報学科 2・3年次生

文化情報学部では、特定のテーマについて文系と理系の教員が学生と共同で演習を展開する「プロジェクト(2009年度生よりジョイント・リサーチ)」という必修科目を設置しています。文系・理系で異なる

視点・考え方・方法論をどのように融合して文化現象を解明するかを教員と学生とが共に考える授業です。

## Report 01 >>> 学生視点ならではのユニークなテーマ設定

現在2年次では6つ、3年次では7つのユニークなプロジェクトが立てられています。それらの中から「形の計量分析」、「感性メディア情報のモデル化」プロジェクトを紹介します。

「形の計量分析」プロジェクトでは、事物の「形」に内在する文化的背景を科学的なアプローチにより浮き彫りにしようとするのを狙っています。ある班が「レオナルド・ダ・ヴィンチ」の作品に注目しました。ダ・ヴィンチの絵画とされるものは数多いのですが、本人作として間違いないと認められているもの、工房作とされているもの、作風が似ている他の作家のものなどが混ざっています。そこで学生たちは、「これらの作品を、データサイエンスの手法によって判別できないだろうか」と着想しました。現存作品は色彩が当初から変化しているものもあるので、ここでは、色彩精度の良い一冊の画集を選び、そこに掲載される写真画像からデータを取得しました。そして、レオナルド自身の作品とされながら、そうでないという説もある作品を含めて選び出し、人物の顔の部分のRGB明度分布を比較すると、工房作品等がよく分離できることがわかりました。

「感性メディア情報のモデル化」プロジェクトは、人間がさまざまな



対象物に対して感じる感性をモデル化することを目的としています。春学期には、感性を測るために用いられる代表的な手法について、それぞれ2回から4回にわたって3~4名のグループ単位での演習を行います。秋学期には、グループごとにテーマを決めて調査計画を立てて研究を進めていきます。テーマを決定した段階で中間報告会を実施し、テーマの意義や調査計画の適切さについて学生同士での積極的な意見交換を行います。学生が立てたテーマの中には、「本の装丁から受ける印象」「ヒーローのイメージカラーは何色か」など、学生視点ならではのユニークなものも多く、発想の豊かさに感心させられます。

## Report 02 >>> 報告会で自分達の調査計画の優れている点、問題点を明確にさせる

最後に実施する報告会においては、グループごとに成果を発表し、自分達が立てた調査計画についてどの点が優れていて、その点に問

題があったのかを明確にさせるとともに、他グループの研究発表から文化情報学研究の多様性を実感することができます。

### 今後の予定

2009年度からのカリキュラム改変に伴い、「プロジェクト」は「ジョイント・リサーチ」と名前を変えて再スタートすることになりました。学生と教員、また学生と学生とがジョイントして、知を創成していこうという思いが込められています。

● プロジェクトテーマ(2009年度現在)

プロジェクトⅠ・Ⅱ(2年次)	プロジェクトⅢ・Ⅳ(3年次)
感性メディアの計量分析1・2	感性メディア情報のモデル化1・2
テキストの計量分析1・2	テキストのモデル化1・2
歴史情報取得・分析	歴史情報の統合化・歴史遺産活用
非言語情報の計測・解析	情報メディアコンテンツ1・2
文法理論と計量分析・言語運用と計量分析	言語機能のモデル化1・2
言語の計量分析1・2	形の計量分析1・2
	情報の融合とトレンドの創出1・2

# ソフトウェアエンジニアリング

理工学部 | インテリジェント情報工学科 3年次生

このプロジェクト科目は、理工学部・インテリジェント情報工学科の科目(3年次向け)として、開講されています。秋学期・2単位。本PBL科目では、受講生が情報システムを自ら企画し、(1)お客様へのシ

テム提案書、(2)開発計画書、(3)外部設計書・内部設計書、(4)テスト仕様書、などを作成します。いわゆる「Waterfall型開発」を、実践的な形で学ぶ科目です。

## Report 01 >>> プロジェクトメンバーと協調して問題解決する体験を通じ、将来ソフトウェアエンジニアとして活躍するスキルを身につける

この科目では、情報システムの開発プロセスを学ぶだけでなく、ひとつの目標に向かって、プロジェクトのメンバーと協調して問題解決する体験を通じて、将来社会に出て、ソフトウェアエンジニアとして活躍するための基礎的なスキルを身につけることを目的としています。

受講生の人数は最大30名。5つ程度のグループに受講生は分かれ、自分達で主体的に計画をしてシステムを設計し、議論した結果をドキュメント類にまとめてゆきます。2008年度は上限の受講希望者があり、脱落者もなく情報システムの設計に熱心に取り組んでくれました。割り当てられた講義時間内ではプロジェクト活動は終了しないため、各グループとも、自主的に集まって議論を続けたようです。

この種の講義では、情報システムの開発現場で実際にシステムを

開発された方でない、指導が難しい側面があります。そこで、京都のソフトウェア開発企業から講師の方に来ていただいて指導をお願いしています。情報システムの開発経験なども紹介していただくことができ、受講生にも好評です。

### 講義内容のテーマ一覧

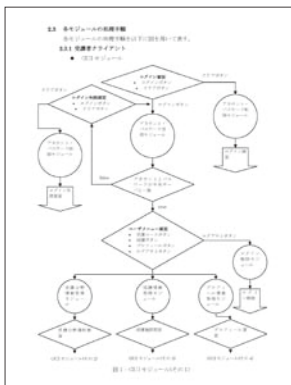
- ソフトウェアエンジニアリングとは
- ソフトウェア開発におけるプロセス
- システム提案書・開発計画書の作成方法
- 外部設計とデザインレビュー
- 分析と設計
- 内部設計とプログラミング
- テスト、品質保証の実施方法
- プロジェクトマネジメント
- ソフトウェア産業の課題とITスキル標準
- 成果発表
- 総合評価

## Report 02 >>> プレゼンテーション、提出ドキュメント類を総合的に評価するプロジェクト型の教育

講義の最後には、Power Pointを用いてプレゼンテーションをしてもらい、受講生相互で評価を行って優秀なグループを選定しています。しかしこの講義では、この最終的なプレゼンのみで成績が決まるわけ

ではありません。通常の講義の際に提出した、ドキュメント類の質・量が最終的な成績に反映されています。「地道に頑張ったグループ」に良い成績をつけるプロジェクト型の教育となっています。

- 作成したドキュメント例



### 教科書

鶴保 征城、駒谷 昇一(共著)

「ずっと受けたかったソフトウェアエンジニアリングの授業(1)(2)」  
翔泳社

# 機械設計製作

理工学部 | 機械システム工学科 エネルギー機械工学科 3年次生

技術者は高度な専門知識を有しているのはもちろんのこと、豊かな創造力を持ち、即戦力となることが社会から求められています。当科目は主に講義を通じて得た専門知識をベースに、学生自身または教員

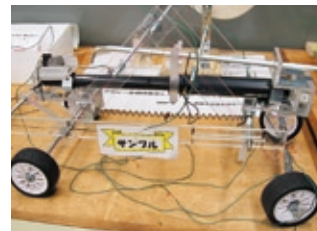
が設定した課題について、学生の自由な発想により実際に設計と製作を行うことによって、機械技術者としての創造性や実践力を養うことを目的とするプロジェクト型科目です。

## Report 01 >>> 課題設定型、アイデア重視型の2つのタイプの課題に設計から製作・動作確認までをグループで取り組む

当科目は必修科目として3年時に配当されています。各担当教員は10名程度の学生を指導し、2～3名の学生が1グループとして活動しています。課題については、問題が与えられてその解決方法にアイデアを膨らませる課題設定型と、基本となる材料または機械要素が与えられて、その応用にアイデアを膨らませるアイデア重視型の2つのタイプの課題があります。担当教員はそのいずれかまたは両方の課題を学生に与えることになっています。

課題設定型では使用する材料、構成要素などはすべて自由であり、今年度は(1)軽くて小さな折り畳み椅子、(2)風力を利用した効率の高い発電機、(3)コップの水がこぼれない防振テーブル、の作製が課題として設定されています。

アイデア重視型では与えられた材料、機械要素等を何に使うかは全く自由であり、(1)形状記憶合金を利用した装置、(2)電気モーターを用いた流体輸送装置、(3)遊星歯車や4節リンク機構を利用した装置、の3つの課題が提供されています。初回の授業では担当教員が当科目の狙い、テーマ説明、班分けを行います。場合によっては材料力学や流体力学など課題設計に係わる基盤的知識の概要説明を行います。学生はその後の数回の授業でグループ内で協力しながら設計基本方針の決定および概念設計を行



います。このとき教員は学生の自由な発想を尊重しつつ、安易な設計に流されないように一層高い目標に向けて学生を鼓舞し、彼らのアイデアを引き出すよう務めています。概念設計をもとに、適切な材料や流通性、加工方法、加工性など現実的な制約を考えながら最適解を模索しつつ詳細設計を行います。担当教員は知識と経験から適宜アドバイスを与えます。設計図面が完成したグループから実習工場にて製作を開始します。

最終提出物はレポート(設計コンセプト、工夫した点、性能等を記述)、製作図面、製作物です。製作物についてはすべてのクラスが合同で品評会を行います。品評会では、“努力賞”、“〇〇賞”などを与えられ、ものづくりの楽しさが印象づけられるようにしています。成績評価は合否判定であり、出席状況と提出物から総合的に判断します。

## Report 02 >>> ものづくりの難しさと魅力を体得すると共に、基礎学問に対する取り組みの重要性を改めて認識できる

教育成果として以下の点が考えられます。

(1)受講生が、アイデアの抽出から設計・製作、動作確認までの一連の過程を1つずつクリアし、ものづくりの難しさと同時に魅力を体

得できます、(2)受講生が、ものづくりに必須となる基礎学問に対する取り組みの重要性を改めて認識します、(3)教員もまた、学生の豊かな発想と学力を認識し、教育活動にフィードバックできます。

### 今後の予定

課題については数年おきに見直しを行っており、先に紹介した課題は今年度より開始したものです。新しい課題も数年するとマンネリ化

し、学生諸君も過去の作品を模倣してしまう傾向があります。予算や製作期間に合った適当な課題を見つけることが必要です。



# プロジェクト科目

全学共通教養教育センター | 全学共通教養教育科目  
全学部(1年次生前期を除く全学年)

プロジェクト科目では、従来の教養教育科目が座学中心の啓発的講義科目にとどまっていたのに対して、社会との連携によるプロジェクト遂行型の実践型・参加型のプログラムとして、社会に偏在するプロフェッショナルな人材を大学教育に導入していこうと試みています。毎年、企業、団体、個人から70～80件の応募があり(初年度は160件

余)提出された書類をもとに、厳格に採否を審議・決定し、採択されたテーマ提案者を本学の嘱託講師として採用し、学生指導に直接取り組んでもらっています。採択数は、25～30件です。なお、本学の専任教員が科目代表者としてアドバイザーの役割を果たしています。

## Report 01 >>> 学生の自律的・主体的な学びを重視した地域・社会の現場で学ぶ社会連携型PBL

開講科目のテーマは、「まちづくり」や「政策提案」に関するテーマ、「環境」に関するテーマ、教育に関するテーマ、「演劇」や「スポーツ」などの身体表現を通して交流を提案するテーマ。あるいは、「高齢化社会」「地域福祉」など時代を反映したテーマ。「国際」、「ものづくり」といったキーワードを持つテーマなど多岐にわたります。公募ならではのユニークなテーマであり、こうしたテーマの独自性と多様性が、鮮度のよい良質の教材として、担当者の感化力とともに教育効果を生み出します。

### 2008年度プロジェクト科目

- 「食育と健康」(薬膳の食養生を中心として)
- 「F1をつくろう!(2008 JSAE 学生フォーミュラーカー大会出場を目指して)」
- 玩具産業を通じて学ぶ学生のための「実践と自立のための玩具企画開発」
- 新京都みやげの創造
- 京都の文化的景観 その保全活用とまちづくりを結ぶ
- 私の「着てみたいいきもの」をプロデュースしてみよう

学生は、5～19名の少人数のチームを基本にしたPBL(プロジェクト・ベースド・ラーニング)遂行型の授業を経験します。教養教育科目の特徴を活かして、学部・学年を超えた学びのコミュニティを形成しつつ、そこでコミュニケーションをはかりながら、目的を共有してチームで学ぶ喜びと学習意欲を高めていく工夫をしています。チームが「個」の力を伸ばし、「個」の力がチームの力を引き出していくという双方向的な関係が生み出されています。

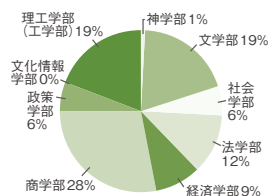
プロジェクト科目は、学生が地域・社会の現場で活動し、現場の抱える問題を地域・社会とともに考え、その解決策を模索していく社会連携型PBLです。ここでは、学生の自律的・主体的な学びが最も重視されます。そのために適宜、各種講習会やワークショップを開催し、各学期ごとに成果報告会を行っています。なお、報告会終了後に、総評と全科目の個別講評の文書を担当者に送付しています。また、受講生のプロジェクト学習を支援するためにCNS(SNS型学習支援サービス)を開発し、全受講生、科目担当者、科目代表者、科目協力者が活用しています。

## Report 02 >>> 成果はマスコミ、新聞にも取り上げられるとともに現場の支援、協力を得ている

2006年度から今年度まで、1,000名を超える学生が履修してきました。それぞれのプロジェクトの成果はマスコミ、新聞にも取り上げられるとともに、地域・社会の現場からあたたかい支援と協力と肯定的な評価をいただいています。授業評価アンケートでも、受講生・科目担当者の満足度は高く、プロジェクト活動を通して得た学びの奥行きを深さを受け止めることができているようです。

※本取り組みは、文部科学省 平成21年度「大学教育・学生支援推進事業」(大学教育推進プログラム)に採択されました。

### 2008年度プロジェクト科目登録者学生所属学部比率



□神学部 □文学部 □社会学部 □法学部 ■経済学部 □商学部 ■政策学部 □文化情報学部 ■理工学部(工学部)



### 今後の予定

学内で展開されている正課、課外のプロジェクトとの連携をはかるとともに、学外で実施されているPBL型教育との教育機関を超えた連携を模索し、なお一層PBL学習の普及・発展に寄与していきます。PBLの教育効果の測定、

評価指標の具体化、プロジェクト・リテラシー教育の可能性を探り、何より学生の学習意欲を誘発する環境と条件を整え、「良心」をもとにプロジェクト・リテラシーを適切に運用し、自らの人生を設計できる人材を育成していきます。

プロジェクト科目URL <http://www.doshisha.ac.jp/students/curriculum/pbl/>

# プロジェクト科目(キャリアセンター提案科目)

全学共通教養教育センター | 全学共通教養教育科目  
全学部(1年次生前期を除く全学年)

キャリアセンターでは、従来からキャリア形成プロジェクト、インターンシップ、ボランティアの3つのキャリア形成支援プログラムを実施していましたが、これに有機性と連続性をもたせるとともに、新たにプロジェクト科目と海外インターンシップを組み合わせたプログラムを、文部科学省の平成19年度「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」に申請し採択されました。本科目は、1年次生から履修可能な「キャリア開

発と学生生活」(導入科目)の展開科目に相当するもので、他のプロジェクト科目と到達目標を共有しながらも、その具体的な展開方法としては、企業と連携する中で学生自身が低年次の一般学生向けイベントを通じて、他の学生に「働くことは何か」を実感してもらえる企画を実践するものです。

## Report 01 >>> 課題を企画・運営・実践していく中で企業理解を深め 自らが学んだことを学生目線で伝える

受講者は2年次生が中心になりました。企業理解の浅い受講者自身が、この科目の課題を企画・運営・実践していく中で企業理解を深め、他の低年次学生に自らが学んだことを学生目線で伝えなければなりません。そのため学生たちは、自ら最初に初歩的なビジネスマナー、ビジネススキルを学んだ上で、イベント実施に協力していただいた企業に向き、イベントを通じて他の学生に「働くこと」を体験・体感してもらえる企画作成のアドバイスをいただきました。試行錯誤の中でそれを具体化し、11月にはイベント運営を行ない、1月には最終成果報告会で発表しました。その後、「理想の合同企業説明会提言書」をまとめました。



## Report 02 >>> コミュニケーションの大切さ、視野の拡大、 論理的思考などを身体レベルで学んだ

学生は、企業の方と連携しながら自らの企画を実現するのですが、そこには課題と関係に関する葛藤がありました。前者では、「働くこと」を知らない学生が他の学生に「働くこと」を伝える企画はどうあるべきかと途方に暮れる葛藤などです。後者では、チームを形成する科目登録者自身が役割分担をしながら計画的に目的を実現していく際の困難や、企業の方にどのように接し、どのように働きかければ効果的な

アドバイスをもらえるのかという悩みでした。

プロジェクト実施を通じて、コミュニケーションの大切さ(伝達・理解・信頼関係)、視野の拡大、論理的思考などを身体レベルで学んだのですが、最大の成果は、彼ら自身に、この経験を継続したいと願う態度が形成できたことです。

### 今後の予定

前年度のプロジェクト科目履修者以外に、インターンシップ参加者などからボランティアを募集し、それぞれの経験を更新する機会を提供

することによって、プロジェクト型キャリア形成支援プログラムの効果を他の学生にまで拡大する予定です。

# 実践神学研究演習9 「教会インターンシッププログラム」

神学研究科 | 神学専攻 博士課程前期(研究科)

神学研究科の教育目的の重要な柱の一つは、言うまでもなく日本キリスト教団の教職(牧師)養成です。その牧師たちの使われる現場は、各個教会を始めキリスト教主義学校、病院、あるいは福祉関連諸施設など多岐にわたります。本研究科は、すでに長年にわたってこれらの現場と連携をとりながら現場実習を行ってきた経緯があります。ただ、この数十年は様々な経緯により、それらの実習は授業の枠組み

の外で行われており、実習を行った学生に単位を与えることはしてきませんでした。ところが、近年大学全体の取り組みとして、盛んにインターンシップが奨励されるようになり、実習の正規科目化が進んできたため、すでに数十年来本研究科が実施してきた教会などを現場とする実習を「教会インターンシップ」として、正規科目化し、それらの科目の履修学生に対して単位を与えることにしました。

## Report 01 >>> 実施期間中、担当指導者とのスーパーヴィジョンを実施 担当教員とはグループ討議と個別指導の二つの形式にて実現

実習期間中は現場の担当指導者との定期的なスーパーヴィジョンが実施され、担当教員との間では授業時間内で、グループ討議形式と個別指導の形でプログラムが実現されています。

学期末にはそれぞれの履修学生が実習現場報告を行います。また、現場からは担当指導者による評価が規定の書式によって行われます。

## Report 02 >>> 大学院で座学としての神学を学ぶ一方、実習を通して将来の現場を先取り

通常、本学部前期課程修了生で牧師を志すものは、日本キリスト教団の補教師試験を受け教団の教師となります。大学院で座学として



の神学を学ぶ一方、将来の現場を先取りする形で実習を行うことで、座学、実践の双方向の対話が起これ、研究がよりいっそう地に足の着いたものとなり、促進されることが期待されます。そして実践的には、こうした実習が将来の現場での働きにとっての良い備えとなることは言うまでもありません。



### 今後の予定

これまで一部を除いて、実習現場はほぼ各個教会に限定されてきたが、教会の高齢化、宣教の課題の多様化を視野に入れるならば、それ以外の諸施設(例えば福祉関係の施設や病院、学校など)も積極的

に実習現場として取り入れていきたいと考えています。ただし、これは相手のあることなので、現場との地道な関係構築が必要となるでしょう。